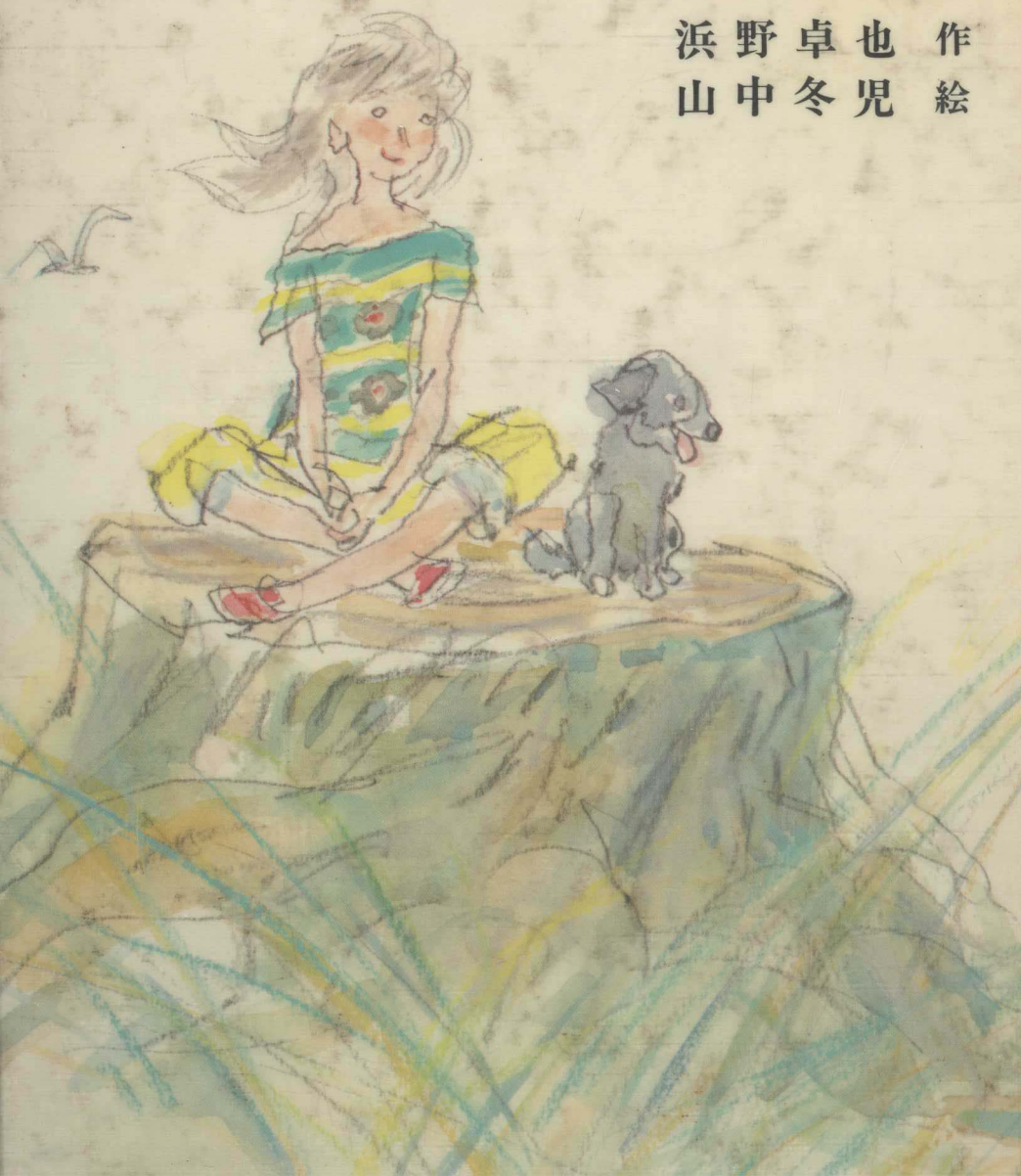


あの子はやっぱり 黄色い UFO

ユー フォー

浜野卓也 作
山中冬児 絵



こども文学館 36

定価 780円

あの子はやっぱり黄色い UFO

1983年 5 月 第 1 刷

作 家 浜 野 卓 也 (はまの たくや)
画 家 山 中 冬 児 (やまなか ふゆじ)
発行者 久 保 田 忠 夫
発行所 株式会社 ポ プ ラ 社

〒160 東京都新宿区須賀町 5

振替東京 4—149271

印 刷 新 興 印 刷 製 本 株 式 会 社
製 本 富 士 製 本 株 式 会 社

落丁本、乱丁本はおとりかえいたします
N.D.C. 913/190p/22cm 8093—095036—7764

Printed in Japan

©浜野卓也 山中冬児 1983

あの子はやっぱり 黄色いUFO^{ユーフォー}



作 絵 卓 也 野 中 山
濱 野 卓 也 作
山 中 冬 児 絵

はじめに

若草^{わかぐさ}がもえそめたころ

とつぜん つり橋^{はし}に

髪^{かみ}の長い女の子が立っていた

まるで 黄色い UFO^{ユーフォー}のような出現^{しゅけん}だ

少年は びっくりして立ちすくんだ

でも 女の子のそばで 黒い小犬^{こいぬ}が

しっぽをふっているのを見ると

少年は 思わずほほえんだ

と 女の子も白い歯^はを見せた



あの子はやっぱり黄色いUFO^{ユーフォ}

／もくじ

1 黄色いUFO^{ユーフォ} 8

2 ヤマカガシをつかまえろ 35

3 弥平^{ひら}さの秘密^{ひみつ} 48

4 木のぼり運動会はいかが 63

5 よつぱらった、おれ 82

6 仲よし学校 95

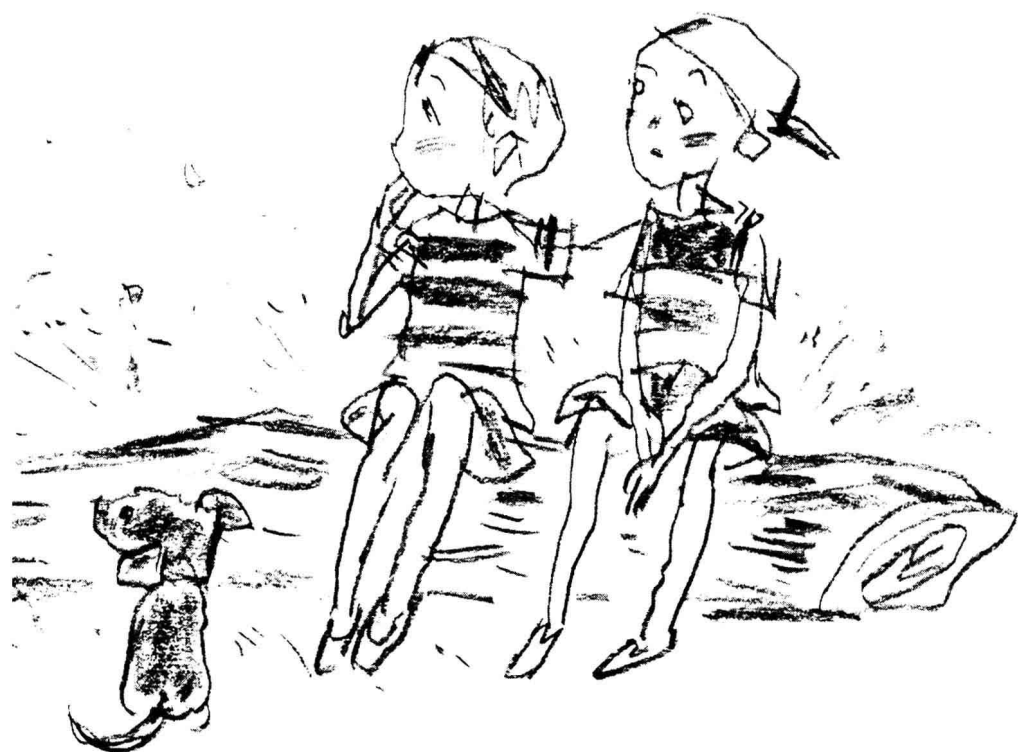
7 先生のガール・フレンド 119

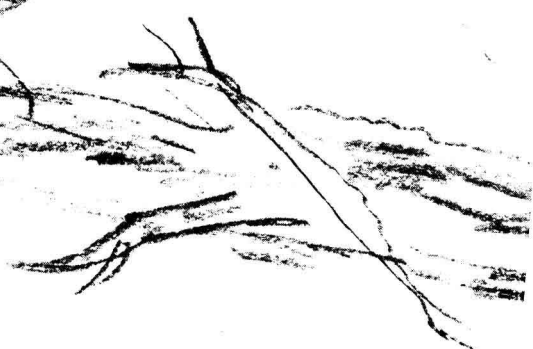
8 クロ、さびしいか 134

9 おいなりさんに願^{ねが}かけた 149

10 つり橋^{はし}ゆすれ！ 165

あとがき 189





▶作家・浜野卓也（はまのたくや）

1926 年、静岡県に生まれる。早稲田大学卒業。創作、評論に幅広く活躍している。作品に、「堀のある村」「やまんばおゆき」（サンケイ出版文化賞）「とねと鬼丸」（小学館文学賞）。評論に、「新美南吉の世界」「いはれなき哀しみの詩——立原道造」がある。

現在、日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会会員。

▶画家・山中冬児（やまなかふゆじ）

1922 年、大阪に生まれる。中之島洋画研究所に学ぶ。絵本に、「あめあめふれふれ」「かあさんのうた」「だいもんじの火」「ゼロは手品つかい」、さし絵に、「美しいぼくらの手」「二死満塁」「5 年 3 組の番長たち」「5 年 2 組はどろんこクラス」「四年一組にきた子」など多数ある。

あの子はやつぱり

黄色いUFO

ユーフォ

浜野卓也 作
山中冬児 絵



1 黄色いUFO

ユーフォー



1

“黄色いズボンの女の子”を、さいしよに見たのは富夫^{とみ}なんだそう^おだ。

「日曜^{ゆう}の夕^{ゆふ}がただ、せっけんと、かんづめを買っていてもん。まちげえねえぞ」

富夫のやつ、ヤマイモのつる^{つる}を十本も見つけたときのように、目をまるくしていった。

「おれは、もっと近くで見たぞ。林道^{りんどう}をのぼってきたら、馬頭観世^{ばとうかんぜ}音^{おん}のところ^{ところ}で、あいつがぼっ立^たってるじゃんか。おったまげた、おったまげた！」

大きい^{おほい}のぼるがいうと、ちびの富夫は首^{くび}をのぼすようにして聞いた。

「マツダセイコに、似^にていたっけか？」

「わからねえよ。ていさいわるいべ、顔なんかよく見なかったもん。でも、なんだか、ぬいぐるみの人形^{にんぎょう}を

だいていたみたいだった」

と、のぼるはいつてから、また思いだしたように、

「そうそう、そのとき、なんだか黒いぬいぐるみが、動いたみたいだったな」

きいていておれは、やっぱりあの子だと思った。でも、なんとなく、こっぴどくしかつたからだまっていた。

すると、教卓きょうたくの花びんに、ツバキをいけていたクラス委員いんみんの道子みちこが、

「動くぬいぐるみなんてないよ」

といって、わらった。

ところで、これはきのうの話だ。雨がふったので、昼休みひるやすみも教室にとじこめられ、たあいもなおしやべりをしていたというわけだ。

だが、きょうは、きのうの雨がうそのように晴れあがった。それに風もなくてあたたかかったので、昼休み、おれたちは、きのうのうっぷんを晴らすように、運動場でサッカーボールをけとばしていた。すると、ゴール・キーパーをやっていた富夫とみおが、

「あっ、あの女の子だ！」

ときけんで、校庭こうていの柵さくに走りよったのだ。

おれも、ボールをけろうとしていた足をとめた。のぼるも、

「ほんとだあー、きょうも黄色いズボンをはいているぞ」

富夫が深い谷川ぞいの林道りんどうをのぞきこんで指さしたので、みんなも柵さくにかけよった。

林道は谷川にそって、県けんざかいの峠とうげにつづいている。

おれたちの草山分校くさやまぶんこうは、林道を見おろすがけの中腹ちゅうふくをきりひらいたところにあった。

“黄色いズボンの女の子”は学校下の林道を走っていく。

風があるのか、女の子の走るのがはやいのか、長い髪かみが、うしろへうしろへなびいていく。

その女の子の前になったり、あとになったり、黒い犬いぬも走っていく。

やっぱりあいっだ……とおれは思ったが、みんながなんていうか聞いてやれとしらんぷりして
いた。

もちろん女の子は、がけの上の分校でおれたちが見おろしていることに、気がつくはずはなかつた。

と、女の子の横を、材木ざいもくをいっぱい積んだトラックがとおりすぎ、すがたがかくれた。トラックが大きくがけ道みちをまがって見えなくなったとき、“黄色いズボン”も、黒い犬も見えなくなっていた。

「あらわれたかと思うと、すーっと消えてよ、まるで、UFOユーフォみたいじゃなか」

と、のぼるが、けげんな顔でいった。

みんな、“黄色いズボンの女の子”は、いったいどこの、だれのうちの子なのだろう、という顔をしている。

おれたちの住む草山は、山のなかの小さな集落で、行商や、営林署の役人のほかは、みな顔見知りだから、こう思うのもむりはないというもんだ。

けれどもおれは、ついおかしくなつて、

「はっははは……」

わらいだしてしまつた。

「なにがおかしいだ」

富夫が口をとがらせた。

「おかしいさよ、黄色いUFOだなんていうからだずら。ありや、弥平さのそこへきた子だずら

あー」

「なーんだ、太一は知つていたのか」

富夫が、がっかりしたようにいったんで、おかしくなつた。いっちゃわるいけど、ひろすぎるセーターのまる首が、土星の輪みたいで、その上の富夫の、ぼけつとなつた顔がおかしくて、ついおれはわらつちやつたんだ。

弥平さの家は、おれの家の一軒おいたとなりだ。あの女の子は、たしかに弥平さの家の縁側にすわつていたつけ。

「おらあ、よくは知らねえ。日曜は、とうちゃんと浜松へいって、帰ってくるの、おそかつたもんな。でも、そういうやあ、弥平さのそこへ、孫が遊びにきてるって、きのうかあちゃんが、いっ

てたっけもんな」

「じゃ太一^{たいち}は、きょう学校おわたたら、すぐ、帰って、弥平^{やへい}さのところへ、いったらいいずら。みんなできてみべえ」

また、富夫^{とみお}が、土星^{どせい}の輪^わのなかから首^{くび}をのばしていった。

「ばかやろう、わざわざ町の女の子なんか見にいけるかよ。なあ、のぼる」

「おらも、はずかしいからやだ」

のぼるもしりごみした。

「いってみべえよお」

富夫^{とみお}があんまりしつこくいうんで、おれは、ついつい富夫の耳をひっぱった。

「い、いてえ」

「いきたきや、おまえひとりでいけ！」

「らんぼうすんなよ」

のぼるがとめたときだ。

「こら」

と声^{こゑ}がして、南木^{なんき}先生が走ってきた。

「がらくたども、もう授業^{じゅぎょう}はじまつてるじゃないか」

南木先生は、右手でおれの頭を、左手でのぼるの頭をつかみ、きゅっと指をたてた。

「いてて！」

「やめれ先生！」

ふたりが悲鳴^{ひめい}をあげると、南木先生^{なんき}は手をはなして、「わっはっははは」とわらった。

「勉強もようせんから、おまえら頭のなかはからっぽで、すかすかして、とうふみたいにやわらかい。先生のをさわってみろ！」

南木先生が、背^せをまげて頭をつきだした。

「あつくせえ！」

「先生、何日も頭あらってねえな」

富夫^{とみお}がくくん鼻をならして顔をしかめた。

するとこんどは、

「あんたたちー！」

と、職員室^{しよくいんしつ}から声がした。あかちゃんをだいた玉^{たま}

木よし子先生だ。

「いけね、いけね、ミイラとりがミイラになった」

南木先生は、もしやっとう髪^{とうはつ}をかきむしってか

ら、校舎^{こうしゃ}にダッシュしていった。

おれたちも負けずに走りだした。



山の三月はまだまだ寒い。

おれは、おとし亡くなったじいさんの綿いれを着て、テレビを見ていた。

「腹へったなあ、かあちゃん」

台所をふりかえって口をとがらすと、

「そんなに腹へったら、かあちゃんが帰ってくるまでに、湯ぐらいわかしておくだ！」

かあちゃんはきげんが悪かった。

「あんちゃんがいなくなったから、そのぶん手伝ってくれなきゃこまるのに、ひとりっ子になって、またあまくなったぞ」

かあちゃんは、トントンはうちょうで野菜をきざみながらいった。

あんちゃんは中学生なので、水窪の町にある寄宿舎にはいって、土曜日にならないと帰ってこないのだ。

「かあちゃん……弥平さんの家に近ごろ犬がいるみたいだな」

おれは、旗色が悪くなったので、とんちんかんなことをいった。

ほんとうは、弥平さんの孫とかいう「黄色いUFO」のことを聞きたかったのだ。

「幸子さちこさんとこのむすめが遊びにきているらしいな」

「幸子さんでだれだっけ……」

おれは、なんとか“黄色いUFO”ユーフォーのことをかあちゃんの口から聞きだそうとした。

だが、かあちゃんは、

「太一たいち、テレビの音、ちょっと小さくしてみろや」

といって、ほうちょうの手をとめ耳をそばだてた。

「ほれ、とうちゃんが帰ってきた」

それでおれも、テレビの音を小さくして耳をすましてみた。たしかにうえがけ上の道で大型トラッおおがたクの音がする。

「でも、どうしてとうちゃんってわかるう？」

「だって営林署えいりんしよの大型トラックの音だもん」

「大型トラックは一台だけじゃねえぞ」

「ばかだなあ、太一は……あの音は登りの音だべ」

トラックがとまった。だが、すぐにエンジンをふかして、また道をのぼっていった。風がないので、七時だというのに、ま夜中のように静かだった。

キーイ キーイ……

つり橋はしのきしむ音が、聞こえてきた。